

## 董西廂文法筆記

『長田夏樹論述集（上）』第13章

（原載：『神戸外大論叢』第11巻第2号，1960年9月）

原題は「董西廂文法筆記（上）」、金の章宗朝（1188-1208）に成ったとされる説唱文学作品『董解元西廂記諸宮調』の文法体系を記述したものである。構成は第1節「序説」、第2節「実辞」で、虚辞の記述については未完に終わったものと思われる。

諸宮調は金代に盛行した弦楽器の伴奏による語り物の一種で、元雜劇（元曲）の音楽的母胎となった芸能として知られる。『董西廂』は現存する唯一の完全な諸宮調作品で、他には20世紀初頭に西夏の古都カラホト（黒水城）で発見された残巻『劉知遠諸宮調』、及び『雍熙樂府』・『太和正音譜』等に引かれた散曲から再構成される『天寶遺事諸宮調』を数えるに過ぎない。

『董西廂』の現存テキストのうち最も古いのは明の嘉靖36年（1557）刊本で、太田辰夫氏は『中国語歴史文法』（江南書院，1958）において「成立は金でも、もとのままではあり得ない」と述べて『董西廂』を金代の言語資料とすることに慎重であるが、著者は元の時すでに『董西廂』を解する者が少なくなっていたことを示す陶宗儀『南村輟耕録』の記述を引き、その間に間違った校訂はあっても意識的な改竄を経た可能性は少ないとしている。

『董西廂』の言語について論じた先行研究としては、田中謙二『『董西廂』における俗語の助字』（『東方学報京都』18，1950）が著名であるが、田中氏の記述の重点が元雜劇に見られない特徴的な虚辞を挙げることに置かれているのに対して、著者の記述の重点は当然ながらその言語の全般的な記述にある。第2節の記述は名詞、動詞、状詞に分かれるが、特に状詞即ち形容詞の重複形式をAB、ABB、AABB、ABAC等の型に分けて分析しているのが特徴的である。こうした形容詞の多様な構成形式の発生と変遷は、近世中国語研究における主要なテーマの一つとなっており、最近では張美蘭『近代漢語後綴形容詞詞典』（貴州教育出版社，2001）により集成されている。

なお、『董西廂』については、田中謙二氏の門下生諸氏により『董解元西廂記諸宮調研究』（赤松紀彦等著，汲古書院，1998）が発表され、その詳細な訳注は同書の研究における一つの到達点となった感がある。また、『劉知遠諸宮調』についても渡部洋『劉知遠諸宮調語彙索引』（『開篇』単刊6，好文出版，1996）があり、有益な情報を提供してくれる。

（竹越孝）